

中国廈門の城郭都市研究における外邦図の利用

山近久美子（防衛大学校）

I. はじめに

本研究会に参加して、筆者は石原による歴史地理学的研究への外邦図の活用についての考察(石原2003)や研究会での議論を参考に、城郭都市研究における外邦図の利用を考えるようになった。そこで、ここでは中国の廈門を対象に、外邦図を使用した研究の可能性を探ってみたい。

II. 廈門城について

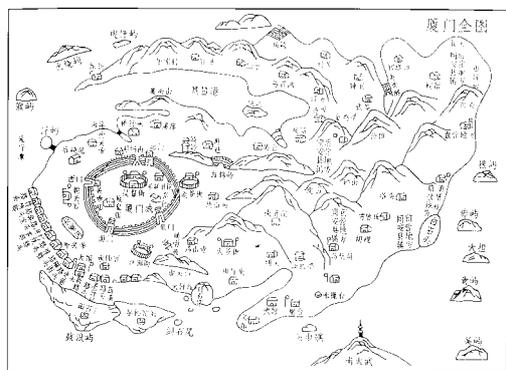
中国東南部の福建省に位置する廈門は現在、経済特区として著しい発展をみせている。その中で、市街地の開発は著しく、筆者が訪れた2004年8月にも街区の改変を目の当たりにした。この地に造られた城については、14世紀の明洪武27(1394)年の廈門城築城の記事が初見とされ、周囲は420丈で4つの門があり、城門上には城楼があったものが、清朝に拡大され、周囲は600丈になったとされる(林2001)。清道光年間(1821~1850年)廈門図(図1)には、円形の廈門城から鼓浪嶼島方面に多くの「路頭」がみえ、島反対側の山がちな表現と対照的である。兵營や要塞が多く、廈門島の性格がうかがえる。廈門城の築城は、対「倭寇」の大規模な海防建設が展開され、海沿いに100を超える

城が築かれたその一環としての意味を持っていた。

1919年の市制開始により古城は廃止され、現在城壁が残されているところは多くなく、日本や中国で手に入る市街地図に城の記載はない。林(2001)によれば、近年城壁の復原も行なわれたようであるが、中心部は公安つまり警察が位置しており、中に入ることはできなかった。しかし中山公園の西南部に古城西路、古城東路という道路を現地では確認することができ、それらが旧城壁の位置を示すと考えられる(図2)。



図2 『中国地図集』廈門
(中国地図出版社2004に一部加筆)



清道光年間廈門図

図1 清道光年間廈門図
(林2001より)

III. 外邦図に描かれた廈門城

では、この部分が外邦図ではどのように表現されているのかを見ていきたい。まず、科学書院発行の『中国大陸五万分一地形図集成』所収の「廈門」である。明治39年発行の図3では、方形と円形の間のような城跡が明確に描かれている。しかし、道路に関しては、南方にのびる主要道路と、それに接続する水仙宮への東西道、虎頭山の東で接続する西北—東南方向の道路とが表現されているが、現地では確認できず、詳細は判明していない。

次に国立国会図書館所蔵の図について2例を挙げる。全閩新日報社の廈門城市全図(図4)は、5000分の



図3 東亜五万分一図廈門14号
 明治35(1902)年測図
 明治37(1904)年製版
 明治39(1906)年発行
 陸地測量部/参謀本部

1の縮尺で1911年に全閩新日報社4周年記念の附贈品として出されている。本図を「外邦図」に含めるかどうか議論になる点と思われるが、国会図書館では外邦図として扱われており、本会の趣旨からしても対象に含めるべき図と考えた。廈門城の城壁が示され、そこに4つの城門が記されている点が特徴的である。また水田や湖、池などの記載がみられる。道路の記載はかなり詳しく、入り組んだ市街地の道路網の様子が読み取れる。

次に、3200分の1廈門市全図(図5)を挙げる。この図は1934年に軍令部によって発行された。秘扱いになっている。民国19(1930)年5月漳厦海軍警備司令部測量處刊行図を基礎とし、昭和7(1932)年2月在厦門日本帝國領事館調製厦門側居留民分布図を参照して調整したとの注記がなされる。大縮尺である上に、土地利用や道路名なども詳細に描かれており、漳厦海軍警備司令部の北側には城壁が描かれている。城壁跡の形態や現在の都市の骨格をなすような道路が読み取れる。

この図は『近代中国都市地図集成』に納められている1938年複製の「廈門市全図」(8500分1 台湾総督府文教局学務課)や1944年複製の「廈門市街図」(1万分1 極秘 調整:台湾総督府文教局学務課)の基になっていると思われる。

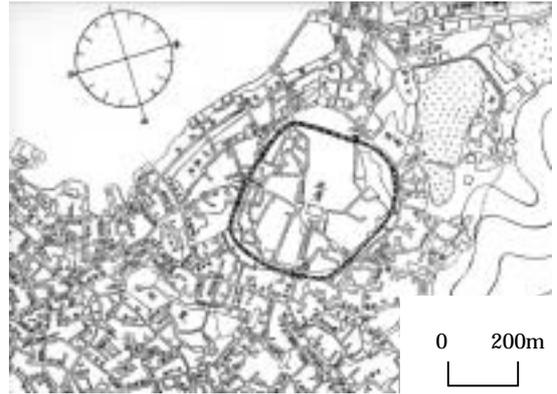


図4 廈門城市全図
 全閩新日報社 1911年

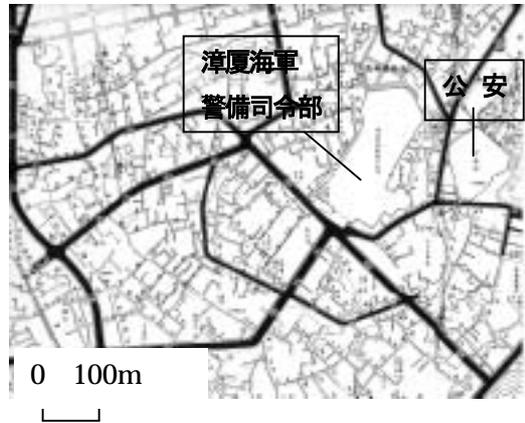


図5 廈門市全図
 軍令部 昭和9(1934)年
 [漳厦海軍警備司令部測量處]

IV. おわりに

最後にこれらの地図を利用した廈門城についての研究の可能性を述べたい。まず、描かれた城壁の形態について復原をする材料となる。時代の異なる地図を比較して、違いが表現上の問題であるのか、何らかの改変の跡なのかに留意しながら、復原作業を進めることができる。また、道路についても同様に現在の道路からでは推定不可能な部分を補うことができる。さらに大縮尺の地図は社会構造の解明にも役立つと考えられる。

このように変化が速くまた大規模に行われている地域では特に復原のための資料として、これらの地図が有効であり、より詳細な分析は新たな研究課題を与えてくれるものと考えられる。廈門には海関が置かれてい



図6 廈門内港
(近代廈門社会経済概況 1990 より引用)

たが、その詳細な資料が提供されている『近代廈門社会経済概況』所収の図6は、鼓浪嶼島については島内の道路や建物についての記載があるものの、廈門島については海岸線のみで内陸は白くなっている。そのような資料の不足を補う意味でも、外邦図の利用は有効

であろう。

しかし、作成された経緯などを考えれば、現在、使い方によっては政治的な問題にまで発展する可能性は否定できない。今後は、中国の研究者の方達と共有し、協力して研究できるような状況を作っていくことが現実的な課題の一つとなるように感じている。

[付記]本稿の作成には、本科学研究費の他に科学研究費補助金(平成13年度～16年度、基盤研究(A)(2)、課題番号13308003、代表者戸祭由美夫「中国文明のフロンティアゾーンにおける都市的集落の発生と変容—その比較地誌学的研究」)も使用した。

文献

- 石原潤(2003)「外邦図は「使えるか」? 中国とインドの場合」外邦図研究ニューズレター, No.1, 11-14頁.
 林沙編著(2001)『活説 廈門』廈門大学出版社.
 秦惠中主編(1990)『近代廈門社会経済概況』鷺江出版社.
 張武冰主編(2004)『中国地図集』中国地圖出版社.